

漢方薬が効かないのは、病態に合った薬方が使われていないという根本的な問題があるが、それ以外の問題によっても、効くべきものが効かされていない。前回は一般用漢方薬が、医療用に比べ少ない服用量が指示されている問題を取り上げた。今回は医療用であっても、本来の効果が発揮される服用法がなされていないという問題を取り上げる。

麻黄湯を例に説明しよう。麻黄湯はインフルエンザに対する臨床試験で、タミフルなどの抗ウイルス薬に劣らぬ解熱効果があることが発表されている。

医師が医療用漢方薬を処方する場合、漢方をよく知らないので、製薬会社の指示に従うことになる。その指示書には「通常、1日7.5gを2〜3回に分割し、食前または食間に経口投与する。なお、年齢、体重、症状により適宜増減する」とある。尚、麻黄湯は本来、煎じ薬で、1回で煎じて出来たものを3回に分けて服用することになっているから、医療用エキス顆粒の1包が煎じ薬1回服用分に相当する。

指示書により、医師は通常、麻黄湯1日3回食間服用という処方をするだろうが、これは麻黄湯本来の服用の仕方ではない。

麻黄湯は最古の薬方書『傷寒論』に載っている。その35章に「太陽病にて、頭痛し、発熱し、身疼み、腰痛し、骨節疼痛し、悪風し、汗無くして喘する者は、麻黄湯、之を主る」とある。当にインフルエンザやカゼの激しい状態の時に麻黄湯がよく効くと記述されているわけだ。

35章の後半に服用法が記述されているのを訳す。「服用後、布団を被ったり、厚着したりして、少ししっとりと軽い汗をかかす。粥をすすってはいけない。その他は、桂枝湯の服用法のように養生する。」

桂枝湯の服用法が12章にあるので訳す。「1回分を飲んで、すぐに熱く薄い粥をすすって薬力を助ける。温かく覆う。2時間ぐらいして全身にしっとり少し汗が出れば、もっと良い。汗がただらとかき続ける状態では、病は治らない。もし1回飲んで汗が出て病態が変われば、もう飲まない。1回煎じたもの(現代での1日分)を必ず全て使うのではない。もし汗が出なければ、同じ様に更に飲む。また汗が出なければ、少し間を短くして更に飲む。約6時間に3回飲む。もし病情が重い者は昼夜、飲み、様子を観る。1回煎じたものを全て飲んでしまって、まだ病態が同じである者は、更に煎じて飲む。汗が出ない者は2・3回煎じた量を飲むことになる。」

医療用エキス顆粒に置き換えて、かいつまんで言えば、汗が出て病態が変わるまで、1包を2時間置きに服用する、ということになる。指示書にある1日分を6時間で飲んでしまい、重い場合には更に飲むというのが本来の服用法である。1日3回という服用法がいかこのんびりしたものであるか分るだろう。もちろん、1回1包の服用で十分な場合もあるが、通常のインフルエンザ患者にはそれでは足りないのである。尚、本格的にカゼを引いて、葛根湯を用いる場合も麻黄湯と同じ服用法である。

漢方本来の服用法を用いれば、麻黄湯・葛根湯はもっと効くはずである。私はインフルエンザに罹った息子や娘をそうやって治療して来た。ただ、単に2時間置きに服用と誤解されても危険ではある。正しく病態の変化を診て、服用を中止し、場合によっては別の薬方を使わなければいけないのである。

本来的に行われていれば、漢方薬はもっと活かされるのに残念である。(2014年4月清明)